

SDGs を踏まえた外国語を使った国際交流プログラム開発事業

立山通学合宿 立少イングリッシュキャンプ～英語を身近に感じよう～

1 ねらい

- ・立山町立小学校に在籍する 5・6 年生を対象に、本施設から各学校へ通学し、寝食を共に生活することで、基本的な生活習慣を身に付けるとともに、自主性や自立心を育てる。
- ・外国語指導助手の方と合宿を行い、外国の言語や生活、文化の違いに触れ、国際理解への興味関心を高める。

2 期日

令和6年11月4日(月・振)～11月9日(土) 【5泊6日】

3 対象

立山町立小学校に在籍する 5・6 年生

4 募集人数 / 応募人数 / 参加人数

50名 / 68名 / 49名(1名参加決定後にキャンセル)

5 講師・スタッフ

立山町に勤務する外国語指導助手(ALT)5名
在外教育施設に勤務経験のある教員3名
国立立山青少年自然の家職員6名
法人ボランティア8名



6 後援・協力

立山町教育委員会
北日本新聞社

7 日程

日付	曜日	午前	午後	夜
11月4日	月振		オリエンテーション アイスブレイク	生活についての学習
5日	火	森の葉っぱ図鑑づくり ※休業日の学校のみ	火起こし・焚火 ※休業日の学校のみ	国際交流のお話
6日	水	学校	学校	英語のことば集め
7日	木	学校	スカベンジャー ハンツビンゴ	野外炊事ピザづくり
8日	金	森の葉っぱ図鑑づくり ※休業日の学校のみ	火起こし・焚火 ※休業日の学校のみ	キャンプファイヤー
9日	土	イングリッシュ オリエンテーリング	振り返り・閉講式	

8 参加者からの事後アンケート

- ・ALTの先生と英語で話すことができたので、もっと外国の言葉などを勉強していきたいです。
- ・新しい友達(中学校で一緒になる友達)ができたし、仲良くできたので良かったです。また、普段親にやってもらっていることを自分でやってみて、大変だということが分かりました。

- ・身の回りのものの英語を知ったり、友達と考え合ったりしている時間がとても楽しかったので、これを活かして、外国語の時間に友達と考え合ったり、教え合ったりしていきたいです。英語は苦手だったけど、今はALTの先生としゃべって楽しかったから、違う国へ行ってその国の文化を知ったり、自分たちの文化を教えたりしたいです。
- ・通学合宿で「自分から話しかけて仲良くなる力」を学ぶことができました。自分から話しかけて友達ができすぎて嬉しかったです。中学校などで声をかける準備ができました。英語の時間では、英語で話してみてもっと好きになりました。ALTの先生も分かりやすく教えてくれました。英語を使うときはたくさんあると思うから、たくさん学んだことを使っていきたいです。
- ・いつも学校で習っている外国語の勉強とちがって、学んでいないこと、習っていないことをたくさん知ることができました。中学校でも会うので、友達がふえてうれしかったです。この通学合宿を通して、学校で習っていない外国語も知れたし、友達もたくさんできたし、早寝早起き朝ごはんも身につきました。とても楽しかったです。

9 成果

- ・昨年度あったスマホやSNSのトラブルについて、未然防止をお願いする文言をチラシや募集フォームなどに掲載した。また、開講式まで保護者に参加してもらい、トラブル未然防止を児童とともに聞いてもらうことで、より事業の意義を理解し、合宿をスタートさせることができた。
- ・学校が異なる児童の班を意図的に編成したが、リーダーをあえて決めなかったことにより、子供同士の声かけが促されたり、自立心が養われたりした。
- ・朝は登校までの時間がタイトなため班を意識した行動をさせなかったが、登校準備や時間を見た行動など、自立を促すことができた。中学校で一緒に学校生活を送ることを見据えた共同生活体験で、学校や学年を越えた仲間づくりが、望ましい生活リズムの中でできた。
- ・下校後のプログラムをすべてイングリッシュプログラムとした。プログラムにはALTが常に講師として参加し、ALTとともにいったことで、英語による自発的なコミュニケーションが行われていた。
- ・在外日本人学校を経験した先生方からの講話も、子供たちは大変興味深く聞き、活発に質問する様子が見られた。

10 今後の課題

- ・4つの窓（自己紹介シート）の「通学合宿でがんばりたいこと」の項目に“特になし”の記述の児童がいた。抽選で落選した児童の中には強い思いをもっている児童もいたと思うと残念である。今後、申込フォームの中にかんばりたいことを聞く設問を設けてはどうか。
- ・本所の利用団体の状況と、立山町内の小学校の学習発表会の日程などを加味すると、令和7年度も11月第1週での実施が望ましい。
- ・学校への通学を伴う長期キャンプとして実施しているため、バス代（交通費）や講師謝金等の予算確保が必要になる。次年度は、受益者負担として、参加費の増額が不可欠となる見込みである。

